

## 発話行為論序説：身体システム論に依拠して

村 上 直 樹

**要旨** 常識的な理解に従えば、発話行為とは、語る主体としての〈私〉が言語という道具を使用して自らの言いたいことを他者に伝える行為である。本稿は、このような理解を斥け、身体システム論に依拠して発話行為に関する新しい理論の基本的な枠組みを構築しようとする試みである。本稿で行われる実質的な作業は次の通りである。まず、発話行為を身体システムの構成素の一つとして措定する。次に、身体システムの産出作動が意識システムに浸透されていることを示した上で、身体システムが発話行為を産出する機制を明らかにする。そして最後に、身体システムによって産出された発話行為がオースティンの言う発語内行為及び発語媒介行為を発現させるための条件を呈示する。

### はじめに

日常生活における人間の行為の多くは、発話行為において／によって遂行されている。しかし、これまでの行為論<sup>①</sup>は、「私がドアを開ける」とか「彼女が首を振る」とかいった身体的な振る舞いを対象にすることが圧倒的に多かった。このような行為論の現状に対して批判的な論者は少なくない。そして、そのような論者の一人である藤本隆志は、「声を発することによって叫び、呻き、唸り、さらには怒り、命令し、懇願し、賞賛し、疑問を発し、約束し、報告し、考え（を述べ）る」といった行為は、「身振り以上に重要な意味をもつ」と指摘し、さらにこれらの行為が「最も人間的な振る舞いのひとつとして、行為論的考察の重要な研究対象にならなくてはならない」と主張している（藤本 1985：339）。我々もこのような主張に同意する。行為論は、身体的な振る舞いととも発話行為をその中心的な対象としなければならない。

ただ、発話行為は、身体的な振る舞いと画然と区別されるものではない。発話行為は、確かに「歩く」、「つかむ」、「食べる」といった身体的な振る舞いとは異なる様態を持っている。しかし、後に論じるように、発話行為も身体的な振る舞いの一つである。本稿の目的は、発話行為を基本的に身体的な振る舞いとしてとらえ、その発現過程と発現の帰結を我々がこれまで展開してきた身体システム論（村上 1999：164－174）に依拠して把握し、そのことを通して発話行為に関する理論の基本的な枠組みを構築することにある。身体システムとは、身体的所作をその構成素とするオートポイエーシス・システムであり、意識システムと相互にカップリングしながらシステムとしての産出作動を継続している。本稿では、発話行為がこの身体システムによってどのように産出され、また産出された発話行為がどのようにして「命令する」、「説明する」、「なぐさめる」、「理解させる」といった日常的な行為として帰結するのかを説明することになるだろう。

ところで、発話行為に関する理論としては、すでにオースティンやサールによって展開されてきた言語行為論が存在する。ここで、我々の発話行為論と従来の言語行為論との関係についてふれておこう。まず指摘したいのは、言語行為論の対象は、すでに生起してしまった発話行

為であるということである。つまり、言語行為論は、発話行為がどのようにして生起してくるのかは問題にしていけないのである。これに対して、我々は、身体システムと意識システムのカップリングに着目しつつ、発話行為が身体システムによってどのようにして産出されるのかを論じる。我々の発話行為論は、言語行為論の射程の外にある問題領域を対象にしているのである。ただし、我々の発話行為論が言語行為論とまったく関係がないかということそうではない。我々は、産出された発話行為が、どのようにして単なる発話行為ではないいわゆる行為として実現するのかをも論じるが、その際、言語行為論の所説が援用されることになるであろう。

では、以下に本稿の構成を記しておこう。まず、1では、前提的考察として、発話行為に関する従来の常識的見解を批判する。2では、発話行為を身体システムの構成素として論定する。3では、身体システムと意識システムのカップリングに着目しつつ、発話行為がどのようにして産出されるのかを説明する。そして、4において、言語行為論の所説を援用しながら、産出された発話行為がどのようにしていわゆる行為として実現するのかを明らかにする。

## 1. 発話行為とはどのような行為ではないのか

常識的な理解に従えば、発話行為とは次のような行為であろう。まず、「語る主体」<sup>(2)</sup>が、自らがおかれている状況を理解し、あるいは目の前の相手の発話の意味を理解し、相手に言わんとすることを考える。そして、その言わんとすることを言葉に置き換え、その言葉を相手に発する。つまり、発話行為とは、言葉という道具＝媒体を使用して、語る主体が自らの言いたいことを相手に伝える行為である。

我々は、発話行為を以上のようなものとは考えない。ここで、このような常識的な見方に関する我々の見解を示しておこう。まず、発話行為とは、言葉という道具＝媒体を使用して自らの言いたいことを相手に伝える行為であるという見方であるが、このような見方は社会学者ニクラス・ルーマンの言う「移転メタファー」(Luhmann 1984 : 193-194=1993 : 217-218) に依拠している。移転メタファーとは、コミュニケーションの理解にあたって無批判に前提とされてしまう図式である。それによれば、コミュニケーションとは送り手から受け手に何か(物や言葉)が送られ移譲されることである。ソシュールの『一般言語学講義』の中の会話を説明するイラスト(Saussure 1971 : 27)、ヤコブソンのコード・メッセージ図式、あるいは日常的に使われる「言葉のキャッチボール」という表現は、この移転メタファーに依拠している。しかし、言語的なコミュニケーションの場合、ルーマンも指摘するようにこの移転メタファーは事実にとぐわない。なぜなら、言語的なコミュニケーションにおいては、送り手は、何かを失うという意味で受け手に何かを手渡してはいないからである(Luhmann 1984 : 193=1993 : 218)。

発話行為は、貨幣のような媒体を他者に譲渡する行為ではない。そもそも発話行為は、根源的には自動詞的な身体的振る舞いである。発話行為は、肺、喉頭、口蓋、鼻、舌、歯、唇といった(本来的には発声のための器官ではないが)言語音を生み出すのにたまたま有用な器官を動かす身体的な振る舞いである(Kristeva 1981 : 24)。そして、その身体的な振る舞いの結果、言葉という知覚的立ち現われが現前するのである。つまり、発話行為とは、語る主体が、語る主体から独立して存在する言葉という道具＝媒体を操作する行為ではないのである。

ところで、言葉という道具を使用して自らの言いたいことを伝達する行為という発話行為の捉え方は、言語化される以前の思考というものを前提としている。例えば、ロックによれば、

言葉とはそれを使用する人の心にある観念を表す記号である (Locke1689=1980:136)。ロックによって明示的に表明されたこのような考え方には、これまで様々な反論が出されてきた。その代表としてメルロ＝ポンティの言語論が挙げられるだろう。メルロ＝ポンティによると、「話者は語る前に思惟するものではないし、それどころか、語っているあいだにも思惟しはしない。すなわち、彼の言葉が彼の思惟なのだ」(Merleau-Ponty1945=1967:295-296)。メルロ＝ポンティは、発話に先立つ観念の原テキストといったものの存在を認めていない。(ただし、後にも述べるように彼は発話行為に先立つ「瞬間的な祈念」といったものの存在は認めていた。) また、心理学者の観察によれば、どのような自然な発話も必ず「エー」とか「アー」などという喉の音を伴うわずかな停滞や、言いよどみ、言いかけ、言い直しなどに満ちている(佐々木1996a:183)。もし、発話行為が観念の原テキストを言葉という記号に置き換えるだけの所作であるならば、このような現象は生じないのではないだろうか。我々も発話行為を言語化以前の思考(言いたいこと)を言葉という記号に置き換える所作であるとは考えない。ただし、言語化以前の思考を想定させてしまうような現象が発話行為の際に生じることは認める。そのことについては、後に論じることにした。

さて、発話行為に関する常識的な理解は、言いたいことを思念し、それを言語化する語る主体の存在を前提としている。そして、この語る主体は知覚の主体であるとも考えられている。「知覚する存在と語る存在とは同じ存在なのであろうか。それが同じものでないということはありえない」(Merleau-Ponty1964=1989:288)。また、語る主体は思惟する主体とも行為の主体ともみなされている。つまり、語る主体とは、デカルト的主体としての〈私〉のことである。ところで、このデカルト的主体としての〈私〉の存在は数多くの論者(例えば大森荘蔵)によって否定されてきている。現在も進行中の主観-客観図式の克服という作業において、デカルト的主体としての〈私〉は世界の項目から排斥されつつある<sup>9)</sup>。すなわち語る主体の存在という前提も確固たるものとは言えないのである。

発話行為は、語る主体という基体によって引き起こされるものではない。発話行為は、語る主体によることなく、次々と生起し消滅していく。次章以降の議論において、我々は、発話行為が次々と生起し消滅していく運動を、オートポイエティックな身体システムの産出作動の一環として捉えることになるだろう。なお、発話行為の過程において、語る主体といったものが想定されざるを得ないということは、我々も認める。それは、発話行為によって現前する声が、あたかも项目的存在としての〈私〉によって語られたものとして現前するからである(村上1998:185-189)。そのことによって、語る主体が不在であるにもかかわらず、発話行為の過程は語る主体によって引き起こされたものであるかのように考えられてしまうのである。

ここで以上の議論を要約しておこう。まず、発話行為とは、言葉という道具を操作する行為ではない。また、発話行為は、語る主体が自らの言いたいことを言語化する行為でもない。発話行為に先立つ観念の原テキストといったものは存在しない。そしてさらに、言いたいことを考え、それを言語化し、発話行為を引き起こす語る主体なるものも存在しない。発話行為とは、語る主体=デカルト的主体としての〈私〉によって生み出される行為ではない。

## 2. 発話行為と身体システム

前章でその存在を否定した語る主体に関して、フーコーは「外の思考」の中で次のように書

いている。

言語活動はもはや言説や何らかの意味の伝達ではなく、生な存在としての言語の展開、露呈された純粋な外在性なのであり、語る主体はもはや言説の責任者（つまり言説を支え、その中において断言しかつ判断し、時にはこの目的のためにしつらえられた文法的な形態のもとに自己を表明する責任者）であるよりは、非存在、その空虚の中において言語の無際限な溢出が絶え間なく遂行される非存在なのである（Foucault 1966 : 524）。

このように規定された語る主体は、もはや通常の意味での主体とは言えないであろう。フォーコーも発話行為が基体としての語る主体によって生み出されるとは考えていないのである。フォーコーは非存在において、言語が次々と溢出するとみなすわけだが、我々は、この絶え間なく遂行される言語の無際限な溢出を、オートポイエティックな身体システムの産出作動の一環として捉えたい。

我々はかつて行為主体の意志によって行為が引き起こされるという図式を否定し、行為を構成素とするオートポイエーシス・システム＝身体システムを措定した（村上 1999 : 166-168）。ここで、問題にしている発話行為も、「歩く」、「つかむ」、「食べる」、「頷く」といった身体的振る舞い一般と同様に、この身体システムによって産出されるものである。身体システムはオートポイエーシス・システムであり、行為を引き起こす基体ではない。つまり、身体システムは、行為主体や語る主体の単なる言い換えではない。身体システムは次々と発話行為を含む行為を産出し、その産出された行為が、それを産出した身体システムを再産出する。身体システムと行為は同時に産出され、どちらかがより基底的というわけではない。

さて、身体システムはその発生の当初からここで問題にしている発話行為を産出するのではない。それが発話行為を産出するようになるのは、ある時期からである。発話行為が生起するようになる経緯を発達心理学や言語心理学の知見に従って、一般的な表現で記述すれば次のようになる。まず、乳児は出生後の呼吸に自動的に適応しようとして泣くが、泣き声も二、三週目ごろから分化し始め、泣き声の強さや質にも変化が見え始める。生後一ヶ月前後になると言葉の構成部分になる発声の仕方が現れる。こうした発声は、大体呼吸のリズムにそっている。これが、いわゆる喃語の時期の始まりである。この時期は、呼吸と関係してたまたま声が出てしまって自分でも驚くという段階から始まり、一人で様々な音声を出して、その反復を楽しむという段階に至る。喃語の音声はきわめて豊富であり、それらは、周囲の大人の声の影響を受けていない。その後、一語文、二語文の時期を経て、乳児は音韻体系を獲得し、いわゆる発話行為を行うようになっていく（野田 1981 : 97-131）。そして、発話行為を行うようになった乳児は、喃語として発していた多様な音声の大部分を放棄するようになる（ヤコブソンの言う「デフレーション」の現象）。母語の音韻体系に属する音素だけが対立的に発声されるようになり、「喃語期の音声学的な豊かさが音韻論的な制限によってかわられる」（Jakobson 1971 : 9）のである。

身体システムはその発生の当初から発話行為を産出するわけではない。それは多様な音声行為を産出する時期を経て、発話行為を産出するようになるのである。

ところで、身体システムによって産出され得る発話行為は無限のヴァリエティーに富んでいるわけであるが、それぞれの時点において産出されるのは言うまでもなくある特定の発話行為

である。では、他の可能性もあるのに何故その発話行為が産出されるのであろうか。言い換えると、身体システムによる発話行為の産出はどのように絞りをかけられているのだろうか。この問いに答えるには、身体システムと意識システムの関係に着目しなければならない。

### 3. 発話行為はどのようにして産出されるのか

#### 1) 身体システムと意識システムのカップリング

オートポイエーシス・システムは、環境との間に入力も出力もない閉鎖系である。しかし、他のオートポイエーシス・システムと作用関係において互いに深く浸透し合うことがある。例えば、社会システムと意識システムは産出関係においては、完全に切り離されて重なり合うことなく作動しているが、作用関係においては内部も外部もないという形で相互に浸透し合っている。オートポイエーシス論では、このような関係を「カップリング」と呼んでいる。そして、発話行為を産出する身体システムも意識システムと密接なカップリングを遂げている<sup>(4)</sup>。

身体システムと意識システムのカップリングは、両者の発生以来のものである。このシステム発生以来のカップリングについて、例えば、精神医学者の藤田博史は(ラカン派の理論の枠内においてではあるが)次のように書いている。「ヒトの子の誕生。現実界としてこの世に姿を現わした身体。身体はまず《知覚＝運動》によって世界を手探りすることから始める。身体としての知覚＝運動は、自らの流儀にしたがって世界を切り出してゆく」(藤田 1993 : 14)。ここで藤田の言う《知覚＝運動》とは、我々の枠組みで言えばカップリングし合った意識システムと身体システムの産出作動のことである。この世に身体が現れるということは、カップリングし合った意識システムと身体システムが発生するということである。そして、《知覚＝運動》が世界を切り出していくということは、意識システムが身体システムの作動に呼応して、言い換えると身体システムが産出する身体的所作に呼応して、次々と新しい構成素＝知覚的立ち現われを産出していくということである。意識システムはその発生の当初から身体システムに浸透されている。同様に、身体システムもその発生の当初から意識システムに浸透されており、意識システムが産出する知覚的立ち現われに呼応して次々と身体的所作を産出している。そして、さらにその身体的所作に呼応して意識システムが新たな知覚的立ち現われを産出することになる<sup>(5)</sup>。このようにして「世界の切り出し」が進行するのである。

以上のように身体システムと意識システムはその発生以来カップリングを遂げており、本稿で問題にしている発話行為も意識システムの構成素に呼応する形で産出される。その詳細については、次節以下で説明するが、その前に身体システムと意識システムの関係に関する基本的な事柄をもう一つ確認しておきたい。

オートポイエーシス・システムとしての意識システムは知覚的立ち現われと思いの立ち現われをその構成素として産出する(村上 1997 : 38-40)。そして、意識システムが産出する知覚的立ち現われは、知覚世界全体＝四次元全宇宙に相当するものであり、その中心には常に「私の身体」と表現するしかないものが位置している。さて、意識システムとカップリングしている身体システムは身体的所作をその構成素として産出するわけだが、身体システムは意識システムとは異なる位相空間で作動するものであるから、身体システムが産出する身体的所作は直接的には知覚世界に立ち現われない。身体システムが産出する身体的所作は、正確に言うとなんら通常の意味での人間の身体の振る舞いではない。しかし、実際には、身体システムによる身体的

所作の産出に呼応して知覚世界の中心に常に位置している「私の身体」の振る舞いが意識システムによって産出されることになる。（これも、身体システムと意識システムのカップリングの一つの側面である。）よって、ここでは、身体システムが（身体的所作を産出することによって）「私の身体」の振る舞いを産出しているとみなして議論を進めている。

## 2) 発話行為と「場面」

意識システムが産出する知覚世界は無限の分節肢を持っている。しかし、知覚世界の全体は、個々の分節肢の単なる総和として立ち現われているわけではない。知覚世界の全体は常に「場面」として立ち現われている。朝食を食べる「場面」、家を出る「場面」、駅に向かう「場面」、電車を待つ「場面」、同僚と仕事をする「場面」……。知覚世界の推移は「場面」の推移である。そして、身体システムは基本的にこの「場面」に呼応して、行為（＝「私の身体」の振る舞い）を産出している（村上 1999：169）。発話行為も「場面」に呼応して産出される。例えば、他人がうずくまっている「場面」に呼応して、「大丈夫ですか」という発話行為が身体システムによって産出されるのである。この場合、他人がうずくまっている姿に「ひっかかり」を持った語る主体＝行為主体が、「発話しないではすまない気持ち」＝「発話への衝動」（灰庭 1979：212）にかられ、「大丈夫ですか」という発話行為を遂行するのではない。他人がうずくまっている「場面」が、まさに声をかけてあげるべき「場面」として立ち現われており、それに呼応して身体システムが「大丈夫ですか」という発話行為を産出するのである<sup>6)</sup>。そこに、「発話における心的過程」（灰庭 1979：204）などは存在しない。「発話しないではすまない気持ち」が起こるというのは、実は、発話すべき「場面」（感謝すべき「場面」、叱るべき「場面」、謝罪すべき「場面」等々）が立ち現われるということなのである。

さて、以上のように、発話行為は「場面」に呼応して産出されるのであるが、幾人かの社会学者も指摘するように、逆に、「場面」＝社会的文脈も発話行為によって規定される（橋爪 1986：65；山崎 1987：17-19）。意識システム論の枠内では、他者の発話も意識システムの構成素として知覚的に立ち現われる。そして、その発話に相互作用する形で、意識システムは新たな「場面」を産出することがあるのである。例えば、他者の「この仕事お願いできませんか」という発話の立ち現われに相互作用する形で、仕事の依頼の「場面」が産出されるのである。通常の言い方で言うと、「この仕事お願いできませんか」という発話が仕事の依頼という「場面」を形成するのである。そして、この依頼の「場面」に呼応して身体システムは発話行為を産出する。くわしく言えば、「この仕事」が過大なものとして立ち現われる場合には、拒絶の発話行為が産出されるだろうし、容易なものとして立ち現われる場合には、受諾の発話行為が産出されるだろう。

サックスやシェグロフによって創始された会話分析が、実際の言語的交通の中に見出した局部支配機構の一つに隣接ペアと呼ばれる発話連鎖がある。これは、呼びかけ／応答、質問／応答、申し出／受諾又は拒絶、陳謝／軽減語、提案／受諾又は拒絶、依頼／受諾又は拒絶、非難／否認又は是認、賛辞／謙遜、挨拶／挨拶のような二つの発話行為（正確に言えば、二つの発話内行為）の決まりきった連鎖のことである（Schegloff&Sacks 1972=1989：185-188）。我々の枠組みにてらして言えば、この隣接ペアの第一部分（問いかけ、申し出、提案、依頼等）は、通常、行為論的にリジッドな「場面」の立ち現われを招来する。例えば、先の「この仕事お願いできませんか」という発話は、仕事の依頼の「場面」の立ち現われを招来する。そして、こ

の「場面」は、同時に依頼を受諾もしくは拒絶すべき「場面」としても立ち現われ、その「場面」に呼応して発話行為が産出されるのである。このように会話分析の隣接ペアは、発話→「場面」の立ち現われ→それに呼応した発話行為の産出、といった連鎖の類型を示したものと考えることができる。

なお、第一部分の発話は常にリジッドな「場面」の立ち現われを招来するとは限らない。少しく説明すると、まず、言語的交通は相対的に二つに区分することができる。日常的な表現で言えば、一つは、何かの用のために行われるものであり、もう一つは、別にとりたてて用はないけれども行われるものである (Tarde 1901=1964: 90-91)。前者は、依頼とか謝罪とか問い合わせといった行為=発語内行為が交互に遂行されていく言語的交通であり、ここではこのタイプの言語的交通を相互行為と呼ぶ。後者は、行為の遂行というよりは発話をなすことそのものを志向した言語的交通であり、いわゆるおしゃべり bavardage がそれにあたる<sup>7)</sup>。さて、相互行為においては、隣接ペアの第一部分は、リジッドな「場面」の立ち現われを招来する。しかし、おしゃべりにおいては、必ずしもそうではない。もちろん、おしゃべりの場合にも、そこに隣接ペアは見出される。しかし、おしゃべりという言語的交通の場は、一貫しておしゃべりの「場面」として立ち現われ続ける。つまり、おしゃべりにおける隣接ペアの第一部分は、新たな「場面」を招来するかもしれないが、相互行為の場合とは違って、その「場面」は行為論的にリジッドな「場面」ではない。例えば、おしゃべりにおいて、提案の発話行為が提案に答えるべき「場面」を招来したとしても、それはあくまでおしゃべりの「場面」の中における「場面」であり、当該の言語的交通の場は、やはり一貫しておしゃべりの「場面」として立ち現われ続けるのである。よって、おしゃべりにおいては、第一部分に答える形で産出される発話行為の内容も、相互行為の場合に比べれば、より自由度に富んだものになるのである。

ただし、おしゃべりの「場面」においても、無原則に発話行為がなされるわけではない。そこには、グライスの言う関連性の格率=「関係のないことを言うてはいけない」というルール (Grice 1975: 46) が存在している。つまり、おしゃべりでは発話が先行する発話に何らかの連想によって結ばれる形で接続していくのである。例えば、同じ学校の同窓生同士のおしゃべりの場合、最近あった子供の運動会に関する発話に自分たちの子供の頃の運動会に関する発話が接続し、さらにその発話に当時の担任の先生に関する発話が接続し、さらにその発話に他の先生に関する発話が接続するというふうな。我々の枠組みで言えば、おしゃべりの「場面」とは、基本的に先行する発話の内容に関連した言述を発するべき「場面」なのである。

以上に述べてきたことを具体例によって確認しておこう。次のやりとりは、おしゃべりの色彩の濃いインタビューからとったものである。

A: もともととはデザイナーですか。

B: グラフィックデザインです。イラストも描きます。京極夏彦というペンネームもイラストの時のものなんです。今も仲間と作った小さな制作プロダクションでアートディレクターをしています。もっとも僕自身は、開店休業中ですが。

これは、問いかけ／応答の隣接ペアとみなすことができるが、Bの発話は、Aの問いかけに行為論的に答える以上の内容を含んでいる。それは、このやりとりの場が一貫しておしゃべりの「場面」として立ち現われ続けているからである。Bの発話行為は、過去の職業について問

いかけられたという「場面」に呼応したものであると同時に、Aの発話の内容に連想によって接続するというおしゃべりの実践にもなっている。もしこれが身元調査のような相互行為におけるやりとりであったなら、Bの発話の内容はもっと異なるものになっていたであろう。

さて、他者の身体的振る舞い及び他者の発話は、身体システムがそれに呼応して発話行為を産出するところの「場面」を招来するわけだが、そのような「場面」を招来するのは他者の存在だけではない。「決意すること」も発話の「場面」を招来する。我々の理論的枠組みでは、「決意すること」は行為主体の心的な振る舞いではなく、意識システムの産出作動である。そして、この「決意すること」は、直接行為を引き起こすのではなく、意識システムによる「場面」の産出に関わっている。「私の身体」を含めた知覚的立ち現われの全体は「場面」として産出されるが、「決意すること」は、その時点におけるこの「場面」のあり方を変えてしまう。言い換えると、新たな「場面」が「決意すること」に相互作用する形で産出されるのである（村上1999：169-170）。よって、何かを言おうと「決意すること」も発話の「場面」を招来する。例えば、会議において何かを発言しようという「決意」や人に道を尋ねようという「決意」が、発話の「場面」を招来する。そして、その「場面」に呼応して、身体システムは発話行為を産出するわけである。

ところで、身体システムが「場面」に呼応してある特定の発話行為を産出する場合、その発話行為は、「他のようでもあり得た」という可能性を持っている。発話行為のあり方は、当該の「場面」によって絞りをかけられるわけであるが、それでも様々な可能性を持っている。以下では、実際に産出される発話行為の様態がどのように規定されていくのかについて考えてみたい。

### 3) 発話行為の様態はどのように規定されているのか

身体システムによって産出される発話行為の様態（言述内容、声の質、間のとり方等）を規定するものとして、まず他者の表情が挙げられる。例えば、仕事の依頼という「場面」に呼応して産出される発話行為の様態は、その時の相手の表情によって異なってくるであろう。依頼を拒否する場合、哀願するような表情には、それなりの言述内容が産出される。拒否の発話行為が他者の表情に協応するわけである。また、発話行為が産出されている際、相手の視線がそれている場合には、間がとられたり発話行為が中断したりする。そして、視線が元に戻ると発話行為が再開され、その際しばしば中断していた発話の全体もしくは部分が繰り返されることになる（西阪1996：41）。これも発話行為が他者の表情に協応している例の一つであろう。

発話行為が産出されている時に意識システムが産出する思いの立ち現われも発話行為の様態を規定することがある。例えば、昨日の会議の様子を質問されたという「場面」を考えてみよう。この「場面」においては、個々の応答の発話行為の際に、昨日の会議の様子（出席者の発言の内容、司会者の表情等）が思いの立ち現われることがあるであろう。そのような場合、身体システムが会議の思いの立ち現われ＝想起に協応することによって、産出される発話行為の様態は規定されていく。また、おしゃべりの場合でも、心像やイメージの立ち現われに発話行為が協応することがある。例えば、いわゆる噂話においては、噂の対象になっている当の人間の具体的な振る舞いが思いの立ち現われ、それに協応して発話行為が産出されたりするだろう。（発話行為の際の心像やイメージの立ち現われについては、次節でまたふれる。）

さて、以上のように発話行為の様態は規定されていくわけであるが、完全に規定されつくし

てしまうわけではない。実際には、せばめられた可能性の中からある一つの様態の発話行為が産出される。そして、何故その様態の発話行為が産出されたのかという問いには答えられない。それは、「無媒介な選択」、「何事にもよらない選択」と言うしかないだろう。我々の理論的枠組みにおいては、身体システムは意識システムの構成素に呼応・協応しながら次々と行為を産出し続けるわけだが、「行為の一番根源的なところに、「無媒介な選択」、「何事にもよらない選択」がある」(松野・郡司・中島・荒川 1996: 398) という松野孝一郎や郡司ペギオ-幸夫の見解には我々も同意せざるを得ない。身体システムはせばめられた可能性の中において何事にも依拠せずある特定の行為を(盲目的に)産出するのである。

#### 4) 言語化以前の思考を想定させてしまう現象について

ここまでの議論で示したように、発話行為はそれに先立つ言語化以前の思考によって導かれるものではない。しかし、1でもふれたように、一般的には、発話行為はそれに先立つ言語化以前の思考(言いたいこと)を言語化するものであると考えられている。それは、言語化以前の思考といったものを想定させてしまう現象が存在するからである。ここでは、そのような現象に関する我々の考えを述べておきたい。

言語化以前の思考を想定させてしまう現象としては、まず、スピーチの際のように話す内容をあらかじめ考えるということが挙げられる。この場合は明らかに発話行為に先立って思考が存在する。しかし、あらかじめスピーチの内容を考えるということは、言語化以前の思考を行うということではない。なぜなら、スピーチの内容を考えるということは、すでに言葉の形＝内言という形で考えるということだからだ。(そもそも言葉ではない形で、スピーチの内容を前もって考えることのできる人などいるだろうか。) よって、前もってスピーチの内容を考えるといった現象は、発話行為に先立って言語化以前の思考が存在するということの証拠にはならない。

発話行為に先立って言語化以前の思考が存在しそれが言語化されるという図式が抗しがたいリアリティーを持ってしまうのは、すでに述べたように、発話行為の際に心像やイメージが立ち現われることがあるからである。例えば、昨日遭遇した交通事故の模様を話す場合、事故の光景が思ひ的に立ち現われることがあるだろう。メルロ＝ポンティは、発話に先立つ観念の原テクストの存在を否定した。しかし、発話行為に先立って、「瞬間的な祈念」(Merleau-Ponty 1945=1967: 301) ないしは「無言の祈願」(Merleau-Ponty 1960=1969: 142) が存在することは認めている。これらは彼の言葉によれば、「心のうちにある意味的な志向」(Merleau-Ponty 1960=1969: 140) である。そして、先の交通事故現場の思ひ的立ち現われをこの意味的な志向の一つとみなすことは自然かもしれない。しかし、それは、「語によって充填されるべき」(Merleau-Ponty 1960=1969: 140) 意味的な志向なのではない。言い換えると、それは発話を引き起こすものではない。心像やイメージが立ち現われることは、何かを言おうとする意志が生まれることではないのである。そうではなく、心像やイメージの立ち現われに協応して、身体システムがある特定の様態の発話行為を産出するのである。血まみれの交通事故の現場の想起に協応して、「血まみれだったよ」という発話行為が産出されるのである。そこにあるのは、身体システムと意識システムのカップリングの一齣であり、語る主体が言いたいこと＝意味的な志向を言語化するプロセスではない。(なお、交通事故の現場を陳述するという発話行為そのものは、証言あるいはおしゃべりという「場面」に呼応して産出されるものである。)

#### 4. 発語内行為・発語媒介行為の生起

##### 1) 発語内行為・発語媒介行為と他者

ここまでの議論において、発話行為とはどのような行為か、そして、それはどのようにして産出されるのかを説明してきた。ところで、言語行為論が指摘するように、発話行為は、単に言葉の聴覚的立ち現われを招来するだけの行為ではない。それは、発語内行為として現前し、さらに発語媒介行為を引き起こす可能性を持っている（Austin 1962=1978: 170-177）。本章では、この発語内行為及び発語媒介行為がどのようにして生起するのかを論じたい。まず最初に、発語内行為及び発語媒介行為の生起における一番基本的な前提を具体例を通して確認しておこう。

子供が危険な遊びをしている「場面」の立ち現われに呼応して、身体システムが「危ないから、やめなさい」という発話行為を産出したとする。言語行為論的に言えば、通常、このような発話行為においては注意という発語内行為が遂行され、また、その発語内行為の遂行によってさらに危険な遊びをやめさせるという発語媒介行為が遂行されることになる。しかし、それらの行為は無条件に遂行されるわけではない。つまり、身体システムは注意すべき「場面」、危険な遊びをやめさせるべき「場面」に呼応して、「危ないから、やめなさい」という発話行為を産出するわけであるが、それだけでは、注意並びに危険な遊びをやめさせるという行為は生起しない。なぜなら、当の子供が注意されたと認知しなければ注意という行為は実現しないし、実際に遊びをやめなければ遊びをやめさせるという行為も実現しないからである。つまり、発話行為において遂行される行為＝発語内行為及び発語内行為の遂行によってさらに遂行される行為＝発語媒介行為の実現は、他者に依存しているわけである。これが、発語内行為と発語媒介行為の生起における一番基本的な前提である。そして、我々の理論的枠組みにおいて、この「他者」という存在は多様な様態を持っている。順次説明していこう。

##### 2) 他者1・他者2・他者3

意識システムに関する我々の理論的枠組みにおいて、他者は三つに区分される。まず第一の他者は、知覚的に立ち現われる他者である。この他者は意識システムが産出する構成素であり、我々はこれを他者1と表記したい。なお、この他者1は間違いなく意識システムが産出する知覚的立ち現われであるが、それは、〈私〉の意識内容といったものではない。意識システムが産出する知覚的立ち現われは、〈私〉の意識内容ではない。それはまぎれもない実物である。意識システムが産出するのはいわゆる「私の身体」を含めた四次元全宇宙であるが、それはすべて実物である。知覚的に立ち現われる他者1も、〈私〉が構成した心像といったものではなく、あくまでも実物の他者そのものである。そして、直接的に経験される他者はこの他者1だけであり、他者1が通常考えられている他者にもっとも近い他者である。

ところで、我々は、意識システムの位相学的外部にとりあえず〈実在〉と呼んでいる不可知の存在を理論的に設定している<sup>⑧</sup>。そして、意識システムはこの〈実在〉ともカップリングの関係にあると考えている。〈実在〉にはある特別な部分があり、その部分と意識システムはカップリングをとげているのである。我々は、この〈実在〉の特別な部分を〈性起の座〉と呼ぶ<sup>⑨</sup>。〈実在〉には人類の人数分の〈性起の座〉があり、そのそれぞれに意識システムがカップリングしているのである。

さて、ある一つの意識システムは〈実在〉におけるある特定の〈性起の座〉とカップリングをとげつつ「私の身体」も含めた四次元全宇宙を産出しつづけるわけであるが、〈実在〉には、他の意識システムとカップリングしている他の〈性起の座〉も存在している。この他の〈性起の座〉が第二の他者＝他者2である。この他者2が存在しなければ、他者1は立ち現われない。ただ、本題には関わらないので、この両者の関係についてのくわしい説明はここでは差し控えることにする。

他者1は、ある意識システムが産出した知覚的立ち現われとしての他者であり、他者2は、その意識システムとは別の意識システムがカップリングしている〈性起の座〉である。そして、この他者2とカップリングしている別の意識システムが他者3である。正確に言えば、この他者2とカップリングしている意識システムとその意識システムにカップリングしている身体システムを合わせたものが他者3である。一般的な他者論における他者の内的世界と知覚世界が、この他者3（の意識システムの部分）に相当するであろう。この他者3も、他者2が存在しなければ存在しない。また、他者3（の身体システムの部分）が産出する身体的所作は、他者1の身体的振る舞いとして立ち現われる。

以上が我々が設定している三つの他者である<sup>(10)</sup>。では、本題に戻ろう。

### 3) 発語内行為・発語媒介行為の生起とそれを確認するにあたっての問題点

身体システムによって産出された発語行為は、言語行為論で言う発語内行為として現前し、発語媒介行為を生起させる可能性を持っている。そして、その発語内行為及び発語媒介行為の発現は、以下に述べるように、他者3あるいは他者1の動静に依拠している。発語内行為も発語媒介行為も共に言語行為であるが、それらは、身体システムによって直接産出されるものではないのだ。

しばしば見かける例をここでも使おう。「出ていけ」という発語行為が命令という発語内行為として現前するには、他者3が、「出ていけ」という聴覚的立ち現われを産出し、その立ち現われが出ていけと命令されたという「場面」の立ち現われを招来しなければならない。「出ていけ」という声の聴覚的立ち現われが現前しても、それが命令されたという「場面」の立ち現われに接続されなければ、「出ていけ」という発語行為は命令という発語内行為としては現前しない。また、「出ていけ」という発語行為が相手を追い出すという発語媒介行為を生起させるには、他者3が命令されたという「場面」に呼応して、出ていくという身体的所作を産出する必要がある。すなわち、発語内行為と発語媒介行為の発現は基本的には他者3の動静に依拠しているのである。発語内行為と発語媒介行為は、他者3がある特定の「場面」と身体的所作を産出することによって生起する。

しかし、我々は意識＝身体システムとして存在しているわけであるから、その位相学的外部にある他者3の意識システムの産出作動を見渡すことは絶対にできない。つまり、他者3がどのような「場面」を産出しているのかを知ることはできない。他者3の意識システムの産出作動を見渡せる仮想的な超越的視点に立つのでない限り、発語内行為については、その発現を確実に知ることはできないわけである。ただし、他者1の動静によって発語内行為の成立の有無を推測することは可能である。先の例で言えば、「出ていけ」という発語行為の後で、他者1が実際に部屋から出ていけば、そこで、命令という発語内行為が成立したという推定を得ることができる。また、発語媒介行為に関しては、他者3が産出する身体的所作が他者1の身体的

振る舞いとして立ち現われるわけであるから、他者1の動静によってその発現を確認することが可能である。

発語内行為及び発語媒介行為は身体システムによって直接産出されるものではない。それは、他者の動静に依拠して発現する。そして、これらの行為の発現に関しては、二つの見方がある。他者3の動静を見渡せる仮想的な超越的視点に定位すれば、発語内行為、発語媒介行為ともに、その発現は、他者3の動静によって決まるということになる。しかし、そのような視点はあくまでも仮想的な視点であり、理論の中にしか存在しない。実際に存在するのは、カップリングし合った特定の意識システムと身体システムの視点だけである。ここでは、この一対の意識＝身体システムを、〈ひと〉と呼ぶことにしたい。この〈ひと〉の視点に定位すれば、発語内行為と発語媒介行為の発現は、他者1の動静によって左右されることになる。例えば、「その本とって」という発話行為の後で、他者1がその本を渡してくれれば、要請という発語内行為と本を手渡させるという発語媒介行為が生起したことになる。また、他者1が、「いやだ」と言えば、要請という発語内行為は生起したが、本を手渡させるという発語媒介行為は生起しなかったことになる。

しかし、場合によっては、他者1の動静によって発語内行為、発語媒介行為の発現が確認できないこともある。例えば、先に挙げた危険な遊びをしている子供に注意するケースで、「危ないから、やめなさい」という発話行為に対して、他者1としての子供がきょとんとした表情をした場合、注意という発語内行為が生起したかどうかは不明であろう。また、ある機械の使い方を説明した後、他者1が不安そうな顔で「わかりました」と言った場合、その機械の使い方を理解させるという発語媒介行為が生起したかどうかは不明であろう。〈ひと〉の視点に定位した場合、発語内行為、発語媒介行為の発現を左右するのは他者1の動静であるが、他者1の動静によって常にそれらの生起が確認されるわけではないのである。そして、さらに言えば、〈ひと〉の視点のもとで、ある発語内行為、発語媒介行為が生起したとしても、他者3の動静を見渡せる仮想的な超越的視点のもとでは、生起していないということもあるだろう。

最後に以上の議論を要約しておこう。発語内行為と発語媒介行為の生起は基本的には他者3の動静に依拠している。しかし、他者3の動静を見渡せる視点は理論の中にしか存在しない仮想的な視点であり、他者3の動静を見渡すことは実際にはできない。実際に存在するのは、他者1の動静しか見渡せない〈ひと〉の視点である。そして、この他者1の動静によって発語内行為と発語媒介行為の生起の有無はある程度推測することができる。〈ひと〉の視点に定位すれば、発語内行為と発語媒介行為の生起を左右するのは他者1の動静ということになる。ただし、他者1の動静によってこれらの行為の生起の有無が常に確認されるわけではない。

なお、発語内行為と発語媒介行為の生起が他者の動静に依拠しているということは、すべての行為が身体システムによって直接産出されるわけではないということである。行為の中には、他者の動静に依拠して出来事として生起するものもあるのである。

## おわりに

本稿は、現在我々が展開している身体システム論に依拠して、発話行為の理論を構築するための第一草稿であった。本稿において、理論の基本的な枠組みは一通り呈示したが、我々に残された課題は数多い。最後にその課題を列挙して稿を閉じることにしたい。

まず、身体システムによる発話行為の産出作動について言えば、いわゆる「発達論的」な考察が必要である。2でも指摘したように、身体システムはその発生の当初からではなくある時期から発話行為を産出するようになる。そして、その過程は、それぞれの「場面」に応じてそれぞれ特定の発話行為が産出されるようになっていく過程である。大森荘蔵の声振り論によると、一つの言語を話せるということは、「無限に変化する状況の中で、これまた無限に変化する働きをしようとするとき、どのような発生动作をすればよいかを習得していることである」(大森 1976: 106)。大森の言う「習得」の過程とは、我々の枠組みで言えば、身体システムが「場面」に呼応した発話行為を産出するようになっていく過程のことである。この過程の考察が我々にとっては不可欠であろう。また、3の3)でふれた発話行為の様態が規定されていく機制に関しても、さらに網羅的な分析が必要である。

4では、発語内行為、発語媒介行為といった言語行為の生起について論じたが、そこで取り上げた例は、単一の発話行為において／によって生起するものに限られている。しかし、例えば、「説得する」、「抗議する」、「謝罪する」、「勧める」といった言語行為は、通常、単一の発話行為において／によって実現するものではなく、他者との相互行為を通して実現していくものである。このような他者との相互行為を不可避的に含み複数の発話行為の積み重ねによって実現していく言語行為を分析対象にすることも、我々の発話行為論を十全なものにするためには必要であろう。

#### [註]

- (1) 行為論は次の二つに区分される。一つは、行為そのものに着目しその説明を目的とするもの、もう一つは、制度や社会のミクロ的基盤として行為を分析するものである。ここで言う行為論は前者を指す。
- (2) 「語る主体」という言葉を頻繁に使用したのはソシュールであるが、幾人かの論者が指摘しているように、ソシュールは人間が言葉を発するという場面を認識論的モデルとして設定したことはなく、彼の言う「語る主体」とは、実質的には「聴く主体」を意味している(立川 1986: 79-83)。これに対して、本稿で言う「語る主体」とは、文字通りの「語る主体」すなわち発話行為の主体のことである。
- (3) デカルト的主体としての〈私〉が世界の項目から排斥されつつあるということは、身体という台座に〈私〉という実体が主体として宿っていると考える近代の図式が廃棄されつつあるということである。ただ、橋爪大三郎も指摘するように、この近代の図式に代わる確固とした理論はまだ提出されていない。「いまは、常識的な近代の図式に従って議論するほど単純なものの見方はもはやできないが、かと言って、それに代わる理論が見つからないわけでもないという、中途半端な時期」(橋爪 1996: 20)なのである。なお、現在構築中の我々の意識システム論と身体システム論は、この近代の図式に代わる人間・世界論として企図されたものである。
- (4) 身体システムと意識システムのカップリングに関しては、我々は、すでに村上(1999: 168-173)でくわしい説明を行っている。また、意識システムの詳細に関しては、村上(1997及び2000)を参照されたい。
- (5) 以下の文章は、このような意識システムと身体システムのカップリングのあり方についての生態心理学的な記述とみなすことができるだろう。「私たちが動く時、その動きは環境の構造的流動として視覚に反映します。前進すれば環境の配置の「見え」は進行方向の一点を中心に拡大しますし、反対に後退すれば縮小します。左に回転すれば、配置の全体が右に流れ、右に回転すれば左に流れる。このような視覚的に得られる環境の配置の「見え」の流れが光学的流動であり、光学的流動は、行為を

導く重要な情報となるのです。光学的流動は、身体の動きがつくり出す環境の変化ですが、その変化が身体の動きを制御するわけです。知覚情報の生成と行為の実行は「循環」している」（佐々木 1996 b : 65）。

- (6) ただし、意識システムによっては、他人がうずくまる「場面」を、関わりを持たないで歩き去るべき「場面」として産出する場合もあるだろう。そのような場合には、当然「大丈夫ですか」といった発話行為は産出されないであろう。
- (7) 言語的交通によっては、相互行為とおしゃべりの双方を含むものもあるだろう。仕事の依頼と受諾で始まり、雑談で終わった会話などはその例である。
- (8) 意識システムの位相学的外部にこの〈實在〉を設定する理由、〈實在〉と他の類似概念（カントの言う「物自体」、ボームの言う「内蔵秩序」、プリブラムの言う「第一次的な实在領界」等々）との違いなどに関しては、現在準備中の別稿で詳細に説明する予定である。
- (9) 「性起」という言葉は後期ハイデガーから借用したものである。性起 Ereignis とは、時間と存在を人間に与える動きのことであり（Heidegger 1969=1973 : 38-48）、我々の言う意識システムの産出作動にほぼ相当する。
- (10) なお、この三つの他者の内、他者2と他者3の存在は、絶対に証明されないであろう。他者2と他者3は、我々によって理論的に設定されたものである。また、他者2と他者3を設定するということは、我々が独我論者ではないということである。「私の意識のみが實在し、外界も他者も私の意識の内容にすぎない」という独我論的主張における「私の意識の内容」としての「他者」とは、ここで言う他者1のことである。独我論者にとっては、他者1しか存在しない。（そして、私の意識内容たるこの他者との関係は「現実の交わりではなく、“夢幻”的“交わり”にすぎない」（廣松 1994 : 138）ということになる。）我々もいわゆる人間の直の経験においては、この他者1しか存在しないことを認める。しかし、我々は独我論者とは違って、意識システムの位相学的外部に他者2を含む〈實在〉を、さらに異なる位相学的外部に他者3（他の意識＝身体システム）を理論的に設定しているのである。

## 〔文献〕

- Austin, J. L. 1962 *How to Do Things with Words*, Oxford University Press. =1978 坂本百大訳『言語と行為』大修館書店
- Foucault, M. 1966 "La pensée du dehors," *Critique*, 229, juin.
- 藤本隆志 1985 「行為論の新しい展開」『新岩波講座哲学 第10巻 行為・他我・自由』岩波書店
- 藤田博史 1993 『幻覚の構造：精神分析的意識論』青土社
- Grice, H. P. 1975 "Logic and Conversation," in P. Cole & J. L. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*, Academic Press.
- 灰庭久博 1979 「発話行為論・草稿」『ソシオロギス』第3号
- 橋爪大三郎 1986 『仏教の言説戦略』勁草書房
- 橋爪大三郎 1996 「〈言語〉派社会学」『岩波講座現代社会学 第5巻 知の社会学／言語の社会学』岩波書店
- Heidegger, M. 1969 *Zur Sache des Denkens*, Max Niemeyer. =1973 辻村公一・H. ブフナー訳『思索の事柄へ』筑摩書房
- 廣松 渉 1994 『フッサール現象学への視角』青土社
- Jakobson, R. 1971 *Studies on Child Language and Aphasia*, Mouton.
- Kristeva, J. 1981 *Le langage, cet inconnu*, Seuil.
- Locke, J. 1689 *An Essay concerning Human Understanding*. =1980 大槻春彦訳「人間知性論」『世界の名著 32 ロック／ヒューム』中央公論社
- Luhmann, N. 1984 *Soziale Systeme*, Suhrkamp. =1993 佐藤勉監訳『社会システム理論（上）』恒星社厚生閣

- 松野孝一郎・郡司ベギオ-幸夫・中島敏幸・荒川修作 1996 「Einstein or ARAKAWA」『現代思想』8月臨時増刊
- Merleau-Ponty, M. 1945 *Phénoménologie de la perception*, Gallimard. =1967 竹内芳郎・小木貞孝訳『知覚の現象学 1』みすず書房
- Merleau-Ponty, M. 1960 *Signes*, Gallimard. =1969 竹内芳郎監訳『シーニュ 1』みすず書房
- Merleau-Ponty, M. 1964 *Le visible et l'invisible*, Gallimard. =1989 滝浦静雄・木田元訳『見えるものと見えないもの』みすず書房
- 村上直樹 1997 「心的システム論(上):意識と無意識のオートポイエーシス」『人文論叢』(三重大学人文学部文化学科)第14号
- 村上直樹 1998 「内言の自己意識と〈私〉」日本記号学会編『聲・響き・記号(記号学研究18)』東海大学出版会
- 村上直樹 1999 「行為のオートポイエーシス:主体なき行為論の試み」『人文論叢』(三重大学人文学部文化学科)第16号
- 村上直樹 2000 「意識システムの自己言及的作動と意味世界の産出」『人文論叢』(三重大学人文学部文化学科)第17号
- 西阪 仰 1996 「対話の社会組織」『月刊言語』1月号
- 野田雅子 1981 『乳幼児のことば』大日本図書
- 大森荘蔵 1976 「ことだま論」『物と心』東京大学出版会
- 佐々木正人 1996a 『知性はどこに生まれるか:ダーウィンとアフォーダンス』講談社
- 佐々木正人 1996b 「アフォーダンスと反表象主義」『談』第54号
- Saussure, F. de 1971 *Cours de linguistique générale*, Payot.
- Schegloff, E. & Sacks, H. 1972 "Opening up Closing," *Semiotica*, vol.7. =1989 北澤裕・西阪仰訳「会話はどのようにに終了されるのか」G. サーサス・H. ガーフィンケル・H. サックス・E. シェグロフ著『日常性の解剖学:知と会話』マルジュ社
- 立川健二 1986 『《力》の思想家ソシュール』水声社
- Tarde, G. 1901 *L'opinion et la foule*, Alcan. =1964 稲葉三千男訳『世論と群衆』未来社
- 山崎敬一 1987 「社会的行為における意味と規則」『人文学報』(東京都立大学人文学部)第195号